

# 仙台教区報

発行所 カトリック仙台教区事務所  
 980 仙台市本町一丁目2番12号  
 電話〇二二二一22一七三七一  
 編集・発行人 三浦 平三

## 青森市の宣教百周年を記念し

### 県信徒大会「宣教は私たちの力で」

仙台教区ではすでに創立百周年を祝った教会もあるが、今年は青森市が宣教百周年を迎え、さる9月25日、宣教百年と特別聖年のよろこびを祝う青森県カトリック信徒大会が盛大に開催された。

大会は青森県信徒連絡協議会が主催、青森明の星高校（青森市浪打2の6の32）を会場に、教区長佐藤千敬司教ならびに列席司祭15人による感謝の共同司式ミサ、祝賀会、さらに佐々木博神父（仙台教区・宣教司牧センター所長）の記念講演などが行われ、県内各地から司祭や修道女、信徒約六百五十人が参加した。

#### 百年の宝はいま私たちに

青森県人、歴史家小野忠亮神父は語る。

「青森町の民家の二階を間借りして、天主公教会の看板が掲げられてから百年。人びとの偏見、官憲の弾圧、敗戦の困窮に遭いながらも、ともされた灯は宣教師たちの血の出るような努力、信徒の熱い信仰に支えられて、神

から与えられた宝は今日、私たちの手にゆだねられた」

特別聖年の今年、その宝をもう一度見直して、いかにして人びとの救いとなるキリストの福音を伝えるかを考え、信徒の力を奮い起すために、信徒大会が計画された。大会テーマは、「宣教は私たちの力で」というものである。

#### 感謝と決意に満たされて

祝賀会では、青森市の信徒のために信仰の宝をつたえ、守りつづけてこられた恩人、パリ外国宣教会、聖ドミニコ修道会、ケベック外国宣教会、仙台司教区、聖母被昇天修道女会、殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道女会に感謝状が贈られた。

佐々木博神父の講演は信徒を奮い起たせるのに十分であった。

「神の恵みのうちに働く私たちの力で、社会を福音化してゆかなければならない。うれしいことは人にも伝えたい。これが愛ではない

か。そしてこれがキリスト者の心、キリスト者の働きではないか。まず二人でも三人でもいい。キリストの名のもとに集まり、そこから出発しよう」

その心からの訴え、力のこもった語りかけに、万場は声もなく、目を輝かせてただうなずくだけであった。

#### 全面広告で教会をP・R

最後に参加者は、会場から約一時間をかけて巡礼指定教会である本町教会まで巡礼し、全免償の祈りを唱え、一同で「全世界に行つて」の聖歌を歌いながら大会を終了した。

なおこの大会に先立ち、地元東奥日報紙に全面広告を掲載、バラエティーに富んだ紙面づくりでカトリック教会の歴史と現状をPR、大きな話題を提供した。

Special Advertising

#### 司教日程（10月14日現在）



- 11月3日 石巻カトリック幼稚園落成式
- 6日 築館教会堅信式
- 7日 ケベック会月例会出席（青森）
- 10月11日 神学校常任委員会（東京）
- 13日 古川教会堅信式
- 14日 司祭評議会（仙台）
- 14月19日 教区司祭団懇想会（東京）
- 21日 宮宗連報編集委員会（仙台）
- 23日 八戸塩町教会落成式
- 26日 仙台天使園五十周年記念
- 28月29日 宮宗法連絡協議会本山研修会
- 12月5日 教区司祭団月例会

司牧評、カテドラル建設

来年4月よりの募金開始のぞむ

第13回司牧評議会は、佐藤千敬司教が臨席して9月23日午後、元寺小路教会信徒館で開催。5月改選された新評議員(2年任期)の初会合となったが、小名浜教会古田繁男氏が議長に選出して各提案の審議を行った。

審議の中心はカテドラル建設資金募集開始の件。活発な意見が交わされたが、来年4月から資金募集が開始出来るよう、準備態勢を

レクリエーションで

和やかに

第14回福島県カトリックの集い

第14回福島県カトリックの集いが佐藤千敬司教を迎え、例年どおり9月15日敬老の日に福島市で催された。当日はあいにく朝から雨となったが、会場となった桜の聖母高校には県下各教会の信徒約三百五十人が集まり、一年ぶりに和やかなさわめきにつつまれた。

今年「特別聖年行事―恵みの集い」がテーマ。ひとつの信仰のもと、ひとつの場所に、ひとつの心で集まることの意義を確かめ、恵みに感謝しながら信仰をつよめ、力づくよく明日への出発をしようと思図された。

開会式の後、午前10時から佐藤司教と参加13人の司祭による特別聖年のための共同ミサがささげられ、贖いの聖年の全免償のための



ととのえてゆくという決断にとどまった。理由は教区全体にまだカテドラル建設の趣旨が徹底していないこと、推進のための責任体制が整っていないこと、さらに元寺小路教会との連絡調整が必要なことなどである。以上の方向を進めてゆくため、具体的な建設委員会発足までの準備を行う責任者として、佐藤司教は司教総代理三浦平三神父を指命した。

三浦神父は来年4月募金開始という司牧評の意見を尊重、元寺小路教会との話し合いなどによって具体策を考えると語った。

祈りもささげられた。このミサ献金約12万5千円はインドの貧しい子どもに送られた。

午前11時から桜の聖母短大佐々木信夫教授の特別講演「ブラザーと共に―私のインドでの体験」。カルカタにおけるブラザーたちの献身的活躍、とくにマザー・テレサのはからいによる「死を待つ人の家」での奉仕体験談は、信仰生活の具体的指針を示唆する感銘深いものがあつた。

午後はバレエ、バドミントン、卓球などのスポーツや民謡、歌謡曲、舞踊などに日頃の腕とノドを競い合った。熱戦、熱演に楽しいひとときを過ごした。

今年テーマ毎に話し合う例年の分科会方式をやめて、レクリエーション的な集いを行った。年一回の集いのあり方はなかなかむずかしいが、今年も神と一致、信徒同士の親睦に、新しい経験を重ねたことは確かである。

盛大にミサと祝賀会

塩釜教会 創立31周年

塩釜教会(土井文雄神父)は10月16日午後2時より佐藤千敬司教をはじめ多数の司祭、修道者、信徒を招いて教会創設31周年を盛大に祝った。佐藤司教、歴代主任司祭らの感謝ミサのあと、幼稚園で祝賀レセプションが行われ、30年をしのぶスピーチが次々に披露されるなど、和やかなひとときを過ごした。

塩釜教会の発足は昭和27年、聖堂が建てられ永田徳市神父が初代主任となった時だが、以前から元寺小路教会の巡回というかたちで信徒の集まりはあつた。歴代司祭、信徒の努力で発展し、現在は仙塩地区の主要教会、家庭的な教会といわれている。

聖ドミニコ学院 創立30年

10月8日記念式典を挙げる

本年3月に高校・小学校校舎の増改築を行って施設の充実を示した聖ドミニコ学院は、さる10月8日、教会、教育界関係者を招いて学院創立30周年の記念式典を挙行政した。

午前10時よりの佐藤千敬司教の感謝ミサには全校職員、生徒、関係者が参列、それぞれ代表が感謝と決意の共同祈願を捧げた。

ひき続いて行われた記念式では理事長武田教子修道女のあいさつ、県知事代理、フォス神父(日本カトリック学校連合会)、松良宜三氏(宮城県私立学校連合会会長)の祝辞があり、永年勤続職員が表彰された。

改めて公会議精神を学習

第10回三教区合同司祭研修会

新潟・浦和・仙台三教区の司教、司祭約90人が参加して、合同司祭研修会が10月11日より13日までの2泊3日間、福島市飯坂の公立学校共済組合保養所「あづま荘」でひらかれた。今回は仙台教区が当番。「第二バチカン公会議20年を顧みて」をメインテーマに、次の小テーマの発表とグループでの話し合いが中心となった。

①刷新された新しい教会（新潟・伊藤庄治郎司教）②教会一致エキュメニズム（浦和・ローランド神父）③典礼の変化（新潟・ケレハ神父）④聖職者と信徒の役割（浦和・根本昭雄神父）⑤新しい宣教の理念（仙台・ツゲル神父）。研修会は公会議の最も身近な問題を、発表と自由な話し合いで改めて認識し直すことがねらい。教会分裂の痛みを背負うべきエキュメニズム運動の理解、日本の静けさがほしい典礼祭儀、社会問題と相即不離にある宣教などが話題となった。そして公会議の示すものを司祭の段階にとどめず、いかに信徒に伝え教会の力に養成してゆかがいまの課題として認識された。

イバニエス神父を招き

仙台教区修道院長研修会ひらく

9月23日から25日までの3日間、仙台市戦災復興記念会館を会場に、仙台教区の修道院長研修会が行われ14人が参加した。指導はイ

エズス会司祭のイバニエス神父。

第二バチカン公会議の刷新は、修道生活に根源的な変化と実践をもたらした。一方、社会のさまざまな変化に伴い、修道生活の権威に対する理解と関心がきわめて薄くなったのが現状。イバニエス神父は、公会議の前後を比較しながら、権威や従順について話を進めた。種々の教会公文書をもとに、権威と従順の関係、組織、共同体との関係を神学的、霊的、心理学的に考察した。

価値の多様化など激動する社会状況のなかで、上長者の責任遂行は容易ではないが、しかし単なる組織の管理者ではなく、人間としての交わりを通して神の意志を示すものと認識された。そして霊にみちびかれる者、キリストにおいて成長する者、あらゆる状況を識別できる者であるべきで、祈りによらなければ何ひとつ出来ないことを参加者は痛感させられた。イバニエス神父はさらに、共同体における上長者の具体的なあり方などにもふれて、多くの示唆を与えた。

岩手地区カテキスタ研修会

3泊4日で新約聖書学、ふ

岩手地区で働くカテキスタの研修会が9月12日から15日までの3泊4日間、盛岡市のペトレム外国宣教会本部で行われた。指導はペトレム会管区長ツゲル神父。今回のテーマは新約聖書で、四つの福音書と黙示録の勉強。聖書を私たちのいまの生活に生かしてゆ

んだ。

研修会には岩手県内の教会で働くカテキスタ8人が参加した。カテキスタとは教会で司祭を助けながら、教理の教授、指導を行う人たちで、聖書の勉強はカテキスタの仕事を行ってゆくうえに大事なこと。来年度の研修会にはさらに聖パウロの書簡の勉強を予定している。

マルク・ロジェ・クツル神父

4月頃から体の不調を訴え入院加療中だった郡山教会のクツル神父（ドミニコ会）は、9月22日午前6時15分、東京聖母病院で亡くなった。六十二歳。病名は直腸ガン。

一九二一年2月17日カナダ・ケベック州に生まれ、四二年ドミニコ会で初誓願、四七年司祭叙階、五〇年11月来日した。最初の任地が郡山教会、以後は福島県の各教会で宣教司牧にあたられ東京での生活も長かった。七三年再び郡山教会に赴任、信徒の霊性向上および聖書講読に熱意を示した。穏やかな人柄は多くの人びとから敬愛されていた。

葬儀ミサは遺体を郡山教会に運んで9月24日午後1時から行われ、司教総代理三浦平三神父、ドミニコ会管区長ポリュー神父ら26人の司祭が共同司式、郡山教会主任司祭ガリエビ神父が説教した。雨中にもかかわらず多くの修道女、信徒が参列、訣れを惜しんだ。

83年間目標

小教区教会に  
キリストの平和を!!

「世界布教の日」に訴える

三浦 平三神父

10月23日は「世界布教の日」。各教会の主日ミサで布教についての説教、布教献金が行われたことでしょう。カトリック新聞10月23日号第一面の、教皇ヨハネ・パウロ二世のメッセージは是非お読み下さい。いま私たちが布教に関して心がけるべき多くのことを教えています。必ずお読み下さい。

キリスト教の布教という、街頭説教やビラの配布、スピーカーからの放送などを思い浮かべますが、一方的に叫べばよいというものではありません。キリストの福音が聞き入れられるためには、教会が地域社会にしっかりと根をおろし、一人ひとりの信徒が生活の場で信仰のよろこびの証人になることが必要なのです。

さいきん布教という言葉は、キリストの教えた福音を人びとに宣べつたえ、福音にしたがった生活をするよう働きかける意味で、福音宣教とか福音化といわれています。みな同じ内容です。そしてこのことはキリストご自身、教会と私たち一人ひとりに命じられた第一の使命にほかなりません。

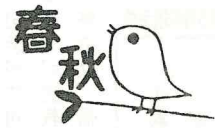
教会も組織が複雑になると、この第一の使命がよく行われるために、実にたくさんのごとが必要になってきます。組織づくりの問題とか、財政の問題とか、人事の問題とか。それらはいずれも布教と無関係なものでないのは当然ですが、よく注意しないと布教とはは

るかに遠い問題として終わってしまいます。教会で行われるすべてのことは、福音宣教||布教を中心に考えられなければなりません。果して私のしていることが、福音宣教の助けになっているのだろうか、とは神の民として忘れてはならない反省だと思えます。

福音宣教あるいは布教を、直接に信徒をふやしてゆくことと考えるには、問題もありません。洗礼を授けて信徒をふやすという考えだけが先行すれば、福音にみだされる福音化ということがおろそかになる危険があるからです。きわめて当りまえのことですが、福音にしたがつて生涯を送ると決意したものだけが洗礼を受け、その信仰を確かなものにするのです。

以上のことを十分に考えたりえて、私たちは福音宣教||布教を第一の活動とすべきでしょう。あらゆる機会を利用して多くの人びとを教会にひきよせ(言葉ではなく私たちの生活態度、生きざまだといわれます)、その人びとの救いを心からのぞんで福音の精神をつたえ(教えるべきことを正しく教え)、神の民の一員とすることです。

私はやはり日本の教会、とくに仙台教区において、正しい洗礼にみちびくまでの福音宣教活動が急務だと感じています。現実の問題として、信徒数の少ないことが多くの障害の原因となつていくからです。混沌とした社会を救うキリストの福音が、空しく叫ばれることのないためです。皆さまに考えていただき、行動に移していただきたいと思います。



春秋

サルベ・レジーナというマリア様に捧げたとても美しい賛歌がある。教会の祈りの中の、寝る前の結びの歌にも選ばれている。トラピスト大修道院では、すべ

ての祈りが終わった最後に、全修道士が聖母の御像のもとに集まって、トラピスト独特の印象的なサルベ・レジーナを歌う。中世紀からたくさんの曲がつけられて歌われているが、日本語は口語のものより、元后あわれみ深き御母、われらの命、慰め、および望みなるマリア：：：という文語訳を知っている人が多いだろう。

先日、郡山教会でのクツル神父様の葬儀ミサで、私はこのサルベ・レジーナを最も感動的に聴いた。聖ドミニコ修道会では、会員を葬るときに全修道士が集まり、サルベ・レジーナを歌って送る習慣なのだという。

ひつぎの中に安らかに眠るクツル神父様を囲んで、兄弟である修道士たちが声をふりしぼってマリア様に祈る姿は、参列したすべての人びとの胸を打った。

神を信じる者の死がただ悲しみではなく、変ることのない主における永遠の結びつきという慰めと喜びを感じさせる姿であり、また異郷に骨を埋める宣教師の力を感じさせる姿でもあった。(M)

特別聖年巡礼の旅  
感慨深かった巡礼

平教会・大河原 達

このたび、8月14日から18日まで行われた仙台教区特別聖年長崎巡礼団「おらしよ、長崎・平戸・津和野に祈る」に参加し、償いと犠牲の巡礼をさせていただきました。信仰をつよめる回心の機会に恵まれましたことは、生涯忘れることの出来ない思い出となり、深く心に刻みこまれたのであります。

大村空港近くの放虎原や長崎西坂の二十六聖人の殉教地、津和野乙女峠の MARIA 聖堂では歴史を目のあたりに見る思い、とくに昇天のレリーフは胸せまるものがありました。津和野ではホルバート神父さんのお話をおききし、翌朝 MARIA 聖堂まで登って行つたのです。が、聖母の騎士本部での「聖コルベ神父の祝日」の第一回記念ミサ、浦上天主堂の聖母被昇天祭のミサなど、毎日ミサに与ることができたのは感激でした。そして、どこの聖堂も長い歴史を持っていて、荘厳で立派というほかありません。一人ひとりの信者が血と汗を流してきづいた信仰の結晶を感じました。

聖母 MARIA 様の御像も美しく深く印象に残っています。とくに大浦天主堂の信徒発見のサンタ・MARIA 像、黒崎教会で赤レンガの聖堂をバックに拝した両手をひろげた MARIA 像が今でもくつきりと頭に入っています。



神の島教会やキリシタンの里といわれる外海の黒崎、出津教会にも行きました。出津では、ド・ロ神父の遺業を見学して、これこそ「教育の原点」であると感じた次第です。自分が工業学校の教師としてつとめた経験がそう感じさせたのかも知れませんが、よくもまあこれだけ出来たものだと感じました。

平戸や山口を訪れて聖フランシスコ・ザビエルの足跡をしのび、長崎各地ともあわせて土着したキリスト教の姿を見て、たいへん考えさせられました。

まだまだ書きたいことはいっぱいあるのですが、とてもいいつくされません。熱心にご説明してくださった聖母の騎士の小崎登明修道士さん、団長の三浦神父さん、そして一緒に巡礼して親しくなつた皆さんがたに心からお礼を申し上げます。

ここにも 神の息吹きが...

塩釜教会・田中 耕蔵

昨年5月から約一年間に、東北地方の太平洋沖合約2千キロの洋上で発生した重傷者が、7人も救助されています。これは全国でも最初という洋上医療支援協議会というボランティア組織が、宮城県に発足した素晴らしい成果です。洋上で急病人や重傷者が出た場合、ヘリコプターや巡視船を乗り継いで患者の手当に赴く医師グループ、船主や船員らの家族グループ、そして人命救助のためいつでも出動するヘリコプター塔載巡視船「さおり」、

この三者ががっちりスクラムを組んで救助活動を行うのです。

はるか洋上のきびしい環境で働いている船員やその家族たちにとつて、急病や大ケガをしたときの心細さはどんなものでしょう。それだけに、このような組織がつくられたことは、救助された方にとつてはもちろんだ、その家族や関係者にとつても、まさに大きな福音といえるのではないのでしょうか。

陸上においても病院をタライまわしにされたあげく、手遅れになってしまふというご時世です。無報酬で、しかも自分の病院を放り出してまでも、ヘリコプターや巡視船を乗り継いで、大シケの海を二日も三日も往診に向かう医師がいるとは、それこそ現代社会の奇跡としか思えません。行政で対応しようとするれば、厚生省、農林水産省、運輸省などからみ、一歩も前進しないような話が、人命救助のために結集した善意の人びとが見事にやつてのけたわけです。

私はここに神の息吹きがあつたのだと信じています。そしてまた私自身こうした活動に参加できて、神の息吹きを感じさせてくださったことに、深く感謝しているのです。

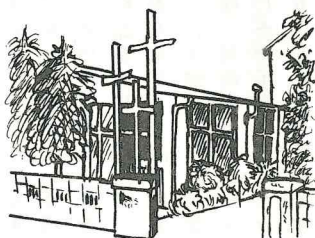
ご投稿 どうぞ

編集部

教区報第5面は信徒皆さん方のページ。ご自由にご投稿下さい。字数は800字(四百字詰原稿用紙2枚)ぐらい。体験記でも、意見でも、随想でも、他人を傷つけないものならなんでも結構。各教会ニュースもどうぞ。

# おらが教会 (37)

仙台・一本杉教会



仙台市一本杉町。四季とりどりの花で市民に知られる養種園の東隣りに、わが一本杉教会がこぢんまりと建っている。

一本杉教会がこの地に建てられたのは一九五七年。当時の教区長小林有方司教の要請に答えて、ケベック外国宣教会が仙台市東南部の旧伊達邸屋敷跡に教会を開設することになった。同年11月末に建物が完成、12月3日聖フランシスコ・ザベリオの祝日に献堂式を挙げた。今年で設立26年目を迎える教会は、人間にたとえるならちょうど青年期、主任司祭ラポア神父は次のように語っている。

「歴史が新しいせいでしょうか、明るくハキハキしていて若さに溢れています。たとえは何か行事のときなど、みんなが協力し合って行事を盛り上げてゆきます。教会の活動はたくさんありますが、ここの教会の持味はよそから来る人びとをわけへだてなく迎えることができること、そうした家庭的な暖かさではないでしょうか。

今年行われた行事はユニークなものが多く

さんあり、そのいくつかを紹介しよう。

教会学校の一環として毎週土曜日にひらかれている土曜学校は、幼稚園児から小学6年生までを対象に、英語と宗教を教えている。大半は信者でない子どもだが、口コミで生徒の輪がだんだん広がっている。子どもたちが勉強している間、お母さんたちが集まっている「神父様といっしょにおしゃべりする会」もますます盛んになってきている。

日曜学校ではこれまでの小学生クラスに加えて、今年から幼児クラスが始まった。小学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんが勉強している間に、絵本を読んでもらったり、粘土細工やゲームをしたり、神さまのことを聞いたり、赤ちゃんからも歳までお母さん方と楽しくすごしている。土曜学校、日曜学校合同のサマーキャンプは2泊3日間泉ヶ岳で行われ、亘理教会も加わって新しい友情の輪をさらに大きく広げることができた。

6月に、父の日になんで行われた、「おやじの会」もユニークな催しだった。教会学校の生徒のお父さんたちが、信者、未信者の区別なしに集まって親睦を深めた。歌が飛び出したり、ユーモラスなスピーチが続いたりして、和やかな集いであった。

8月末に聖歌隊が発足した。クリスマスまでになんとか聞きごたえのあるコーラスにつくりあげようと目下猛練習中。そのためわざわざ参加下さっている未信者の家族もいる。

青年部は10月、作並温泉で信者未信者を含めた交流練成会を開いた。秋のひととき色づ

いた紅葉を眺めて湯にひたり、同時に、神との出会い、人との出会いのすばらしさ、あたたかさにもひたった。

10月からまた家庭集会がもたれるようになった。昼の部と夜の部があり、より多くの人に参加できるよう配慮されている。誰もがそこに自分の場を見いだせる、そんな雰囲気 これらの活動を見いだし、そんな雰囲気がある。

一本杉教会の家庭的な暖かさを支えるものとして、隣接する聖ウルスラ修道院の存在は大きい。創設当初から教会の成長を見守ってきたヨハンナ先生はい。

「この教会は人間でいえば出世ざかり。小さい教会だから互によく知り合えることがいい。いきいきしていて可能性がいっぱい。いつまでも元気でいてほしい」

先生にしてみれば、手塩にかけた子や孫みたいなものだから、その成長がいかに楽しみだとも目を細めて語る。誰もが、「ウチの教会」といえるところに、一本杉教会の特色があると思う。(小田島 輝夫)

## 【編集後記】

9月、10月はいちばん爽やかなとき、たくさん催しなどがありました。それにしてもアツという間の一年で、どんな活動の成果があったのかと反省しきりです。

信仰という霊的なものは外的活動で計るものではないが、それなら私たちの信仰は日々堅固になっているだろうか。この一点に絞ってクリスマスまで努力しよう。そうでないと一年たつのが空しくなりませぬ。(M)